

平成二十三年度

研究所プロジェクト報告

「近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割」

【報告】 研究所プロジェクト

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

《研究期間》 平成二三～二五年

《研究代表者》 石井 隆憲（ライフデザイン学部教授／アジア文化研究所 研究員）

《研究分担者》 三沢 伸生（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

福田 義昭（大阪大学文学部非常勤講師／アジア文化研究所客員研究員）

《研究協力者》 大澤 広嗣（文化庁文化部長事務課専門職／元アジア文化研究所客員研究員）

吉田 達矢（名古屋学院大学経済学部専任講師／アジア文化研究所研究員）

《研究協力者》 トルコ共和国

メルトハン・デュンダル（Merhan DÜNDAR）  
（アンカラ大学言語歴史地理学部准教授）

ギョクニユル・アクチャダー（Gökür AKÇADAĞ）  
（ユルドゥズ工科大学人間科学部准教授）

※そのほか、資料探索、聞き取り調査、現地調査において様々な方から、貴重なコメントや御意見を頂戴しております。紙片の関係上ここにお名前を列記できませんが、この場をお借りて御礼申し上げます。

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

《研究目的》

現在の日本において、野球・サッカー（蹴球）に代表されるように、ヨーロッパ起源のスポーツばかりに注目が集まるあまりに、アジア諸民族の果たしてきた役割に関して等閑視されてしまっている。しかしながら今日の大相撲におけるモンゴル出身をはじめとする外国人力士の活躍に見られるように、近代日本の民族スポーツ生成において、東アジアから西アジア（イスラーム世界）にいたるまでに展開する広範囲なアジア地域の諸民族の影響は極めて大きいものである。

本研究は、このように単に社会において忘却されるのみに留まらず、學術的研究の俎上に取り上げられることが稀有な状況にある、近代日本の民族スポーツ生成においてアジア諸民族の果たしてきた役割について、學術的に研究する上において不可欠となる基礎的資料の発掘・データベース構築を行いながら、解明することを大きな目的としている。より具体的に、本研究では、アジア諸民族のうち、タタール人をはじめとする西アジア民族の役割について解明することを目的として特化し、さらに資料発掘・分析を進める上において単に日本国内だけの状況分析に限定することなく、アジアを舞台にしてスポーツがどのように伝播し、影響関係を構築していったかという近代スポーツ文化の全体像を視野に入れながら、研究を進めていくことを目的としている。

西アジア民族に研究目的を特化するのには、戦後直後の一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、日本においてプロレスに代表されるように格闘技系のスポーツが再編され変容しながら、今日にまで至る民族スポーツとしての地位の基礎を築いていた。この過程において、実は戦前においてロシ

アから日本（日本の植民地であった満洲・朝鮮半島・台湾を奮含む）へ亡命し、日本を終の棲家としていた在日タール系トルコ人たちが、大きな役割を果たしていたからである。戦後という状況において、欧米系スポーツ選手招聘が困難にあるなかで、彼らがときにアメリカ人、ときにソ連人と出自を偽りながら、日本の格闘技系民族スポーツの生成・発展に貢献してきたのである。

本研究は国内外において長らく看過されてきた研究課題であるスポーツ人類学の視点から近代日本の民族スポーツの生成に関する研究を目指すものである。しかしながら国際的学界におけるスポーツ人類学の進展にともない、民族スポーツの多面性・生成過程にかんする諸要素の分析の必要性が指摘されている。国内でも日本の民族スポーツ、すなわち相撲や柔道のような国技と呼ばれる伝統的スポーツから、野球・サッカーのような大衆の圧倒的人気を誇る外来スポーツに至るまで、民族的諸要因が研究されている。本研究はそのなかでアジア諸民族の役割に焦点をあてながら研究する位置づけにある。研究代表者・研究分担者は既に既存の研究プロジェクトで、日本を含めてアジア諸国広域において現地調査を行い、現地研究者との交流を図っている。その意味で本研究は民族スポーツ生成の国際比較とも位置づけられる。

研究分担者・研究協力者は、研究代表者のようにスポーツ人類学を専攻しないものの現地研究に長らく従事しており、戦後日本における在日タール系トルコ人の活躍は日本＝トルコ関係史、さらには日本＝イスラーム世界関係史において、新しい事実を解明する研究として位置づけることができる。

### 《研究経過》

三年間にわたる研究プロジェクトの初年度にあたる本年度は準備段階として位置づけて、国内における文献資料の探索・分析・整理とデータベースの構築、さらに在日タール人および関係者への聞き取り調査の準備を進めた。研究の推進において、文献探索に基づく基礎資料の探索は不可欠であり、研究代表者を中心に近代日本のスポーツ・メディア史上において重要な位置を占める『アサヒスポーツ』（一九二三年創刊）、『週刊スポーツ毎日』（一九四八年創刊）などの活字メディアに注目して、その分析・成果のデータベース化を進めた。また在日タール人の動向を知る上において『読売新聞』が自紙のデータベースとして構築している「ヨミダス歴史館」(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan>)を基本として基礎資料を収集し、在日タール人の動向のデータベース構築を進めた。また在日タール人の動向を掌握する上において鍵を握る人物であり、戦前・戦中期において在日タール人と密な関係を有し、在日タール人に関わる著作を多く残した大久保幸次（一八八七―一九四七年）に注目し、その著作を精査した。

在日タール人関係者への接触は、戦後六五年以上を経過した現在、その痕跡をたどることは難しい。こうしたなかで数少ない著名な在日タール人の格闘技スポーツ経験者であるユセフ・トルコ氏にかんして、三沢が在日トルコ人たちを介して接触を試みている。また関西では福田が神戸モスク関係者の仲介にて、在神・在阪タール人遺族への接触を試みている最中である。館易者への聞き取り調査は極めて重要であるが、調査対象者が限定されている中で、慎重に接触を試みている。